

主な未侵入病害虫の解説

学名: *Shaeropsis tumefaciens*

英名: Shaeropsis Knot

本病は、1904年ジャマイカのライムで初めて発見されたが、病原菌は多犯性であり、近年、カンキツ以外の植物にも発生が報告されている。

分 布 インド、インドネシア、パキスタン、スリランカ、ギリシア、アメリカ合衆国（フロリダ州、ハワイ州）、プエルト・リコ、キューバ、ジャマイカ、トリニダード・トバコ、ガイアナ、ペルー、ベネズエラ、エジプト、モロッコ、スーダン、カメルーン、オーストラリア

寄 主 ライム、レモン、グレープフルーツなどカンキツ属、カラタチ、セイヨウキョウチクトウ及びモチノキ属、カリステモン属、カリッサ属植物など

病 徴 幹及び枝梢に球形、時に細長いこぶを生じる。その大きさは、通常直径2～3 cmであるが、さらに大きくなり7 cm程度に及ぶこともある。こぶの形成は、樹皮がやや白く、粗く、コルク化することに始まる。こぶの表面は柔らかく、砕け易くなることもあるが、内部は堅くなり、褐色の菌糸に由来する黒い条斑が認められる。菌糸はこぶの皮層や木質部に充満しており、木質部で増殖すると、こぶは肥大する。古くなると暗褐色～黒色を呈し、その上に細長い裂け目を生じる。こぶとこぶの間に目立った病徴がなくても組織中で菌糸がまん延し、離れたところに新たなこぶが形成されることもある。やがて、こぶは、かなりの範囲の枝梢に数多く発生し、枝梢を枯死させる。また、しばしばこぶの上に多くの若枝が叢生し、てんぐ巣様を呈して、最終的には枯死する。

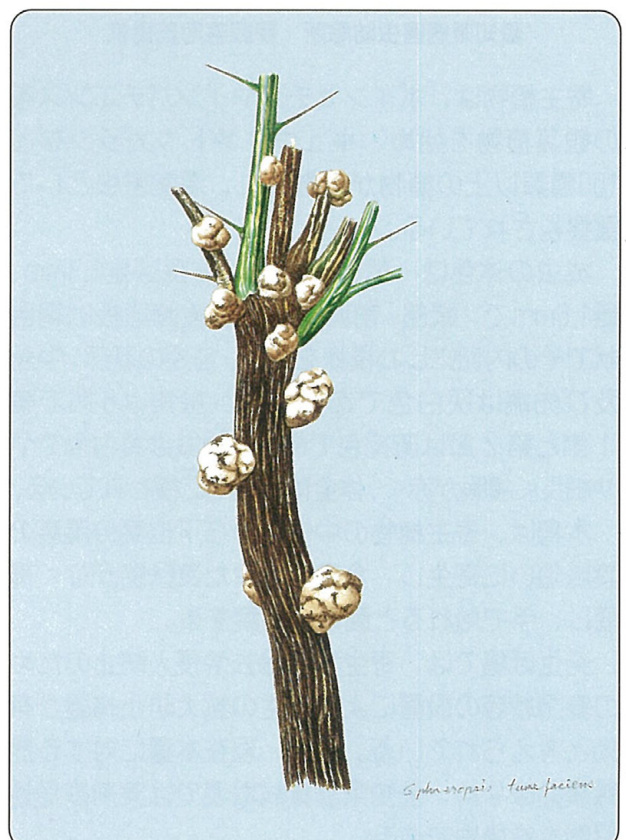
病原菌 本菌は分生子果不完全菌綱に属する。完全世代は知られていない。柄子殻は垂球形・暗褐色～黒色・頂孔を有し、大きさは、直径180～220 μm 、こぶや枯死した枝の外皮中に散生あるいは群生する。分生子柄は無色、倒洋ナシ形～円筒形、大きさ5～10 $\times$ 3～5 μm 、柄

子殻壁の最内層の細胞から生じる。分生子は、単胞（ときに1隔壁）、無色～淡黄色、倒卵形～長楕円形、先端は丸く、基部は平らである。大きさは、20～34 $\times$ 6～10 μm 。また、無色、楕円形～卵形、大きさ、3～5 $\times$ 1.5 μm の小型分生子も生じる。培養すると分生子は約36 $\times$ 8 μm 、しばしば1～2（ときに3～4）隔壁となる。

生 態 本菌は、感染枝が枯死した後もそこで腐生的に長期間生存できる。このため、枯死した枝の上に生ずる分生子が伝染源になると推測されている。傷による感染が一般的であるが、無傷の若い枝梢でも感染が起こる。

被 害 西インド諸島のライムで著しい被害が見られる。ジャマイカではライムと同程度の感受性を有すラフレモンを台木としたバレンシアオレンジ4年樹の約40%が苗木感染により枯死した。近年、被害は観賞用植物にも広がりつつあり、フロリダ州では、セイヨウキョウチクトウでの被害が重要視されている。

防 除 病徴が認められたら直ちに罹病枝を切除し、焼却する。



リンゴムツボシタマムシ

学名: *Chrysobothris femorata* (Olivier)

英名: flatheaded appletree borer

本種は北米大陸原産で、リンゴを含む広範な種類の落葉樹を加害する害虫として知られている。我が国には近縁であるムツボシタマムシ *Chrysobothris succedanea* が分布しており、ウメやカキの害虫として知られている。

分 布 アメリカ、カナダ、メキシコ

寄 主 リンゴ、ナシ、モモ、クリ、クルミなどの落葉果樹、その他コナラ属、カエデ属、ポプラ属、ヤナギ属、エノキ属などの落葉樹

形 態 成虫は体長12mm内外。体は扁平で背面は黒みがかった銅褐色であるが、腹面は銅青色の金属光沢がある。前脚の腿節には前方に張り出した明瞭な突起があり、これが本属の特徴である。翅鞘上には、波形の3対の隆起線があるが、外側の2対は、前・中・後とほぼ等間隔に配列された不定形の横長のくぼみによって分断される。この3対のくぼみは、銅緑色に光る。卵は直径約0.5mm、黄色で不定型の隆起線を有する。老熟幼虫は淡黄色で無脚、体長25mm。頭部は長さよりも幅が大きい。前胸は平たく幅広く背板及び腹板の表面に顆粒をそなえた硬皮板がある。前胸背面硬皮板には、逆V字状の溝があり、腹面の硬皮板には、1本の縦溝がある。

同属の他の幼虫とは、本種が単眼を欠き、腹部の背板及び腹板上に膨大部を有することで容易に区別できる。蛹は体長12mm内外、黄色。

生 態 通常、年1化性である。アメリカ合衆国北部では、成虫は5月初旬から9月にかけて出現する。産卵は寄主植物の幹、枝上の割れ目、樹皮下などに数個まとめて行われる。卵は2～3週間後ふ化し、ふ化幼虫は樹皮と木質部の間を不規則な孔道を作って食い進む。成長した幼虫は、木質部に孔を広げ、蛹室を形成する。寒冷地においては、蛹室内において幼虫態のまま越冬し、翌春になって蛹化するが、暖地においては、晩秋に蛹化し、蛹態で越冬する。成虫は日照を好み、卵や幼虫も寄生木の日の当たる側に多く見られる。

被 害 通常、手入れの行き届いた果樹園では被害は起こりにくい。しかし、乾燥等で衰弱した木や移植直後の苗木では被害を受けやすい。また、若木の場合、幼虫が樹皮下を食い進み、しばしば樹幹を一周するため、寄生が1頭でも枯死する場合がある。

防 除 本虫の防除には、寄主植物の移植後の十分な給水、枯れ枝の速やかな除去や適切なせん定及び十分な施肥等が重要である。アメリカ合衆国では、卵や木の内部に潜る前のふ化幼虫に対して、クロルピリホス、ペルメトリンなどの殺虫剤が使用されている。

